

戸田市文化財調査報告 Ⅲ

南原(高知原)遺跡第1次発掘調査概要

埼玉県戸田市教育委員会

昭和44年

## 掘らばや遠き世々のあと

教育長 岡 田 弘

いま市長室には昨夏の南原遺跡発掘事業を象徴する男子埴輪（頭部）が置かれています。

戸田から埴輪が出ようとは、

しかし、この発掘に踏切ったのは決して当てずっぽうではなかったつもりです。

例えば、

『多吹苑の鐘撞堂附近は渋川氏城館の中心地で、のちには高知原＝たかからはら、といわれた処です。その意味は申すまでもなく、高知＝たかしる所、すなわち政治を行なった処の意味で、園衛の所在地であったと思います。またこのあたりからは、弥生式土器等がたくさん出土したので、あたり一面土器の破片で一ぱいでした。』（岡田恒三郎著「蘇城はどこにあったか」45ページ）

南原の高知原は、いつかは掘らなければ済まされぬところだったのです。その目的を整理してみますと、①昭和42、3年度にわたって発掘した鍛冶谷・新田口遺跡との関連性を浮彫りにする物証をつかみたい。②渋川氏の城館、つまり室町時代の蘇城は、現戸田市内「元蘇」の地にほほゆるがぬ物証を残している（前掲書45ページ参照）が、高知原はこの要塞のなかで果たしてどんな役割を占めていたかを突きとめたい。③さらに同書にもいう「東鑑」記載の、鎌倉時代の豪族戸田六郎の居館跡までもこの地に期待できはしないか。やや欲張った感じですが、今回の成果から専門家はいよいよ戸田全体に対する関心を深め、より雄大なスケールのなかで同遺跡の歴史的意義を評価していただけるに違いないと信じています。

年々巨額の予算計上を快く容れて下さる野口市長、また、市議会をはじめとする関係各位のご支援に感謝するとともに、果教委、ことに塩野先生のご指導のもと、郷土戸田の歴史を、しっかりと市民のものにしたいと思うのです。

戸田は掘るべし。

## 例 言

1. 本書は、昭和44年7月26日～8月4日の10日間にわたって発掘調査した。戸田市戸田南町所在の南原（高知原）遺跡の第1次報告である。

2. 発掘調査は、戸田市教育委員会が主体となり実施した。

3. 発掘調査の担当者は、堀野博氏（埼玉会館郷土資料室主事、日本考古学協会会員）があたった。

4. 出土品の整理は、担当者の指導で、発掘参加者が行なった。

5. 調査、出土品の写真撮影は、堀野博氏が撮影した。

6. 本書の報告は、目次に明記したものが執筆担当したが、文責は、堀野博氏が負うものである。

7. 本書の編集は、堀野博氏と広瀬博文・長谷川忠信・伊藤和彦（戸田市教育委員会事務局）があたった。

8. 発掘調査および整理参加者は、次の通りである。

（国学院大学生）齋藤和子，三橋景子，岩永司，佐藤凌美，丸山保，松本真知子，遠藤 裕子，今泉泰之，（立正大学生）津野有一，（県立戸田高）渡瀬昌忠，（県立蔵高）鮎沼満雄，（戸田市立美笹中）深沢悠紀雄，駒崎実，（戸田市立東中）天野清志

（戸田市長）野口政吉，（戸田市議会議員）秋元正男，（教育委員）奥住孫太郎，（社会教育委員長）日坂盛造，（文化財保護委員）岡田恒三郎，御嶽実英，長谷川泰弘，（戸田市役所）奥墨修一，石垣美恵子，（教育長）岡田弘，（教育委員会）石田恒治，石田英三，広瀬 博文，長谷川忠信，青木登志子，鮫島大三郎，稲垣賢一，岩谷務，伊藤和彦

戸田市文化財調査報告Ⅲ

南原（高知原）遺跡第1次発掘調査概要

目 次

序 例 言	教育長 岡 田 弘
はじめに	（伊藤和彦）…… 1
1. 南原（高知原）遺跡発掘調査の経過	（斎藤和子）…… 1
2. 南原（高知原）遺跡の位置と環境	（伊藤和彦）…… 4
3. 南原（高知原）遺跡の遺構	（塩野博・伊藤和彦）…… 5
(1) 方形周溝墓	…… 7
(2) 古墳の周塼	…… 7
(3) 中世の遺構	…… 9
4. 出土遺物	（伊藤和彦）…… 9
(1) 方形周溝墓内出土の上器	…… 9
(2) 古墳周塼内出土遺物	…… 11
A 土 器	…… 11
B 草 輪	…… 13
(3) 中世の溝状遺構出土の遺物	…… 15
おわりに	（塩野 博）…… 16

図 版 目 次

図版一 南原（高知原）遺跡の景観
(1) 南原（高知原）遺跡の遠景
(2) 南原（高知原）遺跡の近景
図版二 南原（高知原）遺跡の遺構 I
(1) 方形周溝墓
(2) 方形周溝墓北溝
(3) 方形周溝墓南溝

- 図版三 南原（高知原）遺跡の遺構 II  
 (1) 古墳の周堀（北コーナ）  
 (2) 古墳の周堀
- 図版四 南原（高知原）遺跡の遺構 III  
 (1) 人物埴輪（男子頭部）出土状態  
 (2) 円筒埴輪出土状態
- 図版五 南原（高知原）遺跡の遺構 IV  
 (1) 中世の溝状遺構（北側から）  
 (2) 中世の溝状遺構（東側から）
- 図版六 古墳周堀出土遺物 I  
 人 物 埴 輪
- 図版七 古墳周堀出土遺物 II  
 (1) 人物埴輪破片  
 (2) 形象埴輪破片  
 (3) 円筒埴輪

## 挿 図 目 次

- 第1図 南原（高知原）遺跡発掘風景
- 第2図 人物埴輪出土状態を見学する市長
- 第3図 南原（高知原）遺跡（×印）と周辺の遺跡
- 第4図 南原（高知原）遺跡発見遺構全測図
- 第5図 1・3トレンチ土層断面図（その1）  
 1・3トレンチ土層断面図（その2）
- 第6図 方形周溝墓（第1溝）実測図
- 第7図 古墳周堀（第2溝）・中世の溝状遺構（第3・4溝）実測図
- 第8図 方形周溝墓溝内出土の土器実測図
- 第9図 古墳周堀内出土の土器実測図
- 第10図 古墳周堀内出土の円筒埴輪実測図
- 第11図 中世の溝状遺構溝内出土の土器実測図

## はじめに

首都に隣接する戸田市は、急激な社会構造の変移とともに、都市化が目覚しく、新興の都市として、日増しに景観が推移している。それとともに貴重な埋蔵文化財が破壊、消滅の危機にせまられ戸田市教育委員会は、5月5日に埼玉会館郷土資料室主事、日本考古学協会の塩野博氏に依頼し、国学院大学学生の援助を得て遺跡の分布調査を行ない、13箇所の遺物の散布地を発見した。この南原遺跡もこの時に再確認されたものである。

この地は、通称「高知原」と呼ばれ、以前から土器片の散布が知られ、全体的に平坦な低地に位置している戸田の地にあっても、いくぶんか起伏の窺える場所である。この南原遺跡は、土地区画整理事業計画の工場、倉庫等の企業地にあてられた地域で、すでにいくつかの工場、倉庫が建設され、操業を始めているが、さらにまた、空地に倉庫の建設が始まるとの通報が郷土史愛好家の数人から教育委員会にあった場所である。そこで教育委員会教育長は、文化財保護委員会を開き、今後の戸田市内の埋蔵文化財の無秩序な破壊を防止するための善後策を協議した結果、この南原遺跡は早急に発掘調査を行なわなければならない遺跡であるとの結論に達し、記録保存の措置をとることとなった。

発掘調査は、塩野が担当者となり、国学院大学学生、県立戸田高等学校、県立蔵高等学校、市立戸田中学校、美笹中学校の先生、生徒諸君、地元南原町会、また地主の協力も得て、7月26日から8月4日まで行なった。

## 1. 南原（高知原）遺跡発掘調査の経過

### 7月26日（晴）

午後5時、発掘調査担当者塩野博ほか国学院大生は、戸田市役所分庁舎に集合し同市社会教育課職員の家内で、戸田南原遺跡の最終下見に向かう。遺跡は自然堤防の先端に位置し、この付近でも高い地域で、昔から高知原（たかちっばら）と呼ばれていた場所である。

### 7月27日（晴、夕立あり）

午前9時、戸田市議会議長秋元正男、社会教育委員長日坂盛造、教育委員長奥住孫太郎、文化財保護委員岡田恒三郎、御嶽実英、長谷川泰弘、地主石井正徳氏、それに教育委員会教育長、発掘協力者及び、同市教育委員会社会教育課職員によって鎮入式を挙行した。

この後、国学院大生を中心に、発掘地区に1.5m×21mのトレンチを3本、東西方向に設定する。トレンチ間は2.0mで北側より、それぞれ1・2・3トレンチとし、発掘調査を開始した。表土は自然堤防独特の白っぽくかわいた褐色土でボロボロしており、この下の赤褐色土・茶褐色土層を除くと黄褐色粘土質の基盤があらわれる。土質はかなり硬いが、昨年調査した鍛冶谷遺跡に比べると掘

りやすい。トレンチ東側で黒色土層があらわれたが、午後2時ごろよりはげしい夕立のため発掘不可能となり、範囲の確認は明日に持ち越すことにする。しかし、この土層中より形象埴輪片が出土しているので、この黒色土は古墳の周壕とも考えられる。第1日目より思いがけぬ貴重な発見であった。



第1図 南原（高知原）遺跡発掘風景

#### 7月28日（晴ときどき曇）

3トレンチに昨日あらわれていた黒色の落ち込みの確認を急ぐ。表土下70cmの黒色土中に円筒埴輪が出土。墳丘に立てられたものがころがり落ちた状態で、口唇部が下になっている。

各トレンチとも排土をほとんど終了した結果、たくさんの溝が確認される。3トレンチ西側にあらわれた溝を第1溝、古墳の周壕と思われるものを第2溝、その東にあるものを第3溝と命名する。第1溝からは、台付甕の台部、壺の口縁部、底部が出土し、幅70cm位で、溝内の土層、溝の形などから方形周溝墓と考えられる。1トレンチ、2トレンチには第2溝、第3溝があらわれており、両トレンチとも第2溝からは多量の埴輪片、若干の土師器・須恵器片が出土している。1トレンチ東側にはこれらとは別の溝（第4溝）があらわれている。

今日は、昨日午後の遅れをとりもどすためビッチをあけたが、あまり曇り日でなかったため作業はかかなりはかどった。

#### 7月29日（晴）

それぞれのトレンチにあらわれた第1溝から第4溝を掘り下げ、各溝の性格を確かめる。第1溝、第2溝が南側をめぐっているかどうかを確認するため、3トレンチに直角に、第1溝寄りに4トレンチを設定する。1トレンチにあらわれた第3・4溝は段状になっており、須恵器片が1～2片出土している。これらの溝は3トレンチ東側にあらわれた溝でも同様であり、これらの間を直角に走る細い溝も第3・4溝と同様の土質である。3トレンチの溝からはうわぐすりのかかった陶器の破片が出土しているため、中世の遺構とも考えられる。

#### 7月30日（晴）

前日に引きつづき、各トレンチにあらわれた溝を掘る。4トレンチには第1溝、第2溝と思われる溝が出現。さらに詳しく確認するため5トレンチを3トレンチに平行に、6トレンチ、7トレンチを4トレンチに平行に設定する。5トレンチからは、古墳の周壕の一部があらわれた。

また、中世遺構確認のため、1トレンチ、2トレンチと3トレンチの間を拡張するため、積み上げた土を除く作業にかかるが、炎天下のため作業ははかどらず、拡張作業は明日になる。

#### 7月31日(晴)

1～3トレンチの土層実測図作成の一方、トレンチ間の拡張に全力を投入したが、今日から高校生参加者が若干減り、なかなか進



第2図 人物埴輪出土状態を見学する市長(中央)

まない。4トレンチからは男子頭部の人物埴輪が出土する。そのため急ぎで西側に1.0×4.0m拡張し、4トレンチで明確でない第2溝の確認を急ぐ。6トレンチには3トレンチの続きの方形周溝墓があらわれ、ここで切れているため、一方の切れた方形周溝墓であることが確められた。ここからは小形手掘土器片が出土している。

この日、教育長の案内で市長の見学がある。

#### 8月1日(晴)

前日に引きつづき、それぞれのトレンチで拡張、排土作業を進める。相変わらず遺物は埴輪片が多く、それに若干の須恵器、土師器片が出土するのみであるが、遺物が少ないだけに小さな破片でも貴重である。

#### 8月2日(雨後晴)

午前中は雨が降っていたため出土遺物の水洗をした。午後発掘調査にかかる。しかし、雨ががりのため作業ははかどらない。

6・7トレンチを拡張し、方形周溝墓の方台部の精査を行う。中世遺構は、さらに拡張をつける。

#### 8月3日(晴)

6・7トレンチ拡張部は排土を終了し、主体部の精査を試みたが、後世の攪乱により検出不可能であった。方形周溝墓は方形というより、楕円形に近いものである。今日の作業で中世遺構もすべて姿をあらわし、清掃もすんで、明日の写真撮影、測量を待つばかりである。

#### 8月4日(曇ときどき雨)

午前中各遺構の写真撮影を終了。午後には測量も終了し、戸田南原遺跡の全調査を終了した。



## 2. 南原（高知原）遺跡の位置と環境

(図版一の(1)(2) (第3図))



第3図 南原（高知原）遺跡（×印）と周辺の遺跡

遺跡は、埼玉県戸田市南町2312番地にある。附近は、すでに土地区画整理事業が完了し、整然としている。東京から近く、17号国道（中山道）及び新大宮バイパスの開通による交通の要所で、倉庫・工場が多く林立し、もっか急ピッチで建設されている。（第3図）

この遺跡は、標高5m強の旧入間川（現荒川）の流路に並行して発達した、東西にのびる細長い自然堤防上北側に位置する（第3図×印）。この辺一帯は、平坦な戸田市であっても、比較的起伏のある高所で、通称「高知原」と呼ばれている所である。

現存の荒川は、この遺跡の南側、約500mを東流している。また、その間遺跡から100m程離れた場所に、東京オリンピックの際使用された、世界的に有名な静水コースとして知られる戸田オートコースがある。

北側に広がる沖積地は、水田を埋めて宅地化が進んでいるが、水はけが悪く、沼化している所が多い。この低湿地は、古称「菖蒲沼」といわれる自然堤防の後背湿地であり、遺跡の立地条件を満たすに充分な場所である。

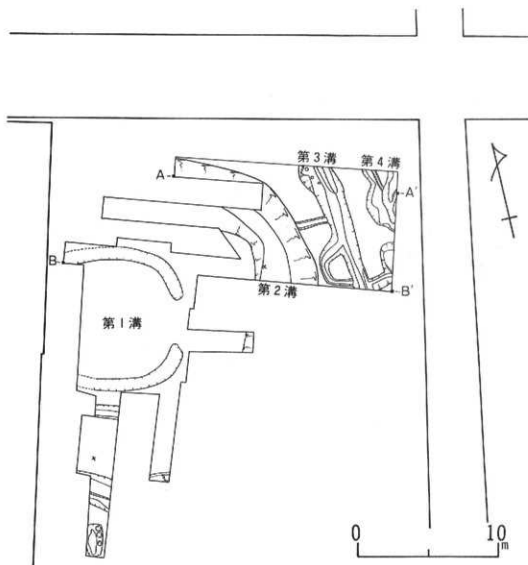
この遺跡のある自然堤防は、火山灰質の砂質粘土からなる黄褐色土層を基盤とする低平な段高地である。おおまかな層序を示すと、表土は、氾濫原特有の、粒子の細かい砂泥りの灰色を呈した土である。この土層の下に、黒色土があり、硬くしまっている。そして、第3層目が基盤の黄褐色粘土層である。

このように、氾濫土で原地表面が厚く覆われているため、土器など遺物の表面採集は、ほとんど不可能な地域でありながら、この地一帯は以前より、多数の土器片の発見があり注目されていた場所である。

遺跡の附近には、北側の後背湿地を隔てた他方の平行する自然堤防上には、「方形周溝集群」として有名な鍛冶谷・新田口遺跡（第3図1）、弥生後期の埴溝遺跡がある。（第3図2）また、すぐ直前の本村には、戸田市唯一の古墳として知られた古墳（円墳）が存在している。（第3図3）

### 3. 南原（高知原）遺跡の遺構

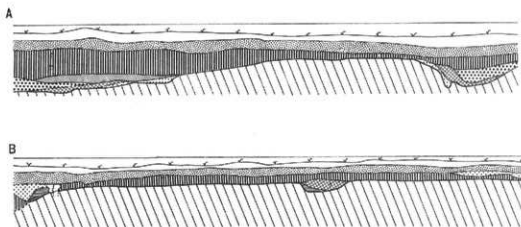
(図版二～五) (第4・5・6・7図)



第4図 南原（高知原）遺跡発見遺構全測図

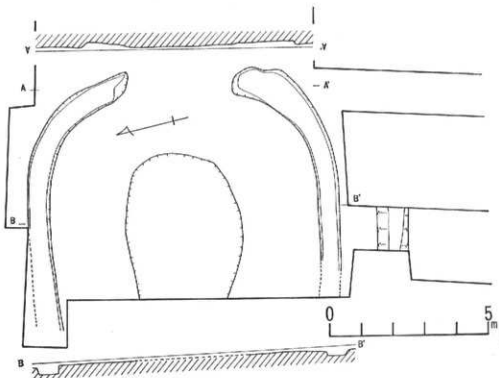
南原遺跡の標準土層の堆積状態は、発掘調査範囲内において最下層の黄褐色粘土層（地山）の上に、酸化鉄や黄色粒子を多量に含む茶褐色土、その上に、酸化鉄を含む赤茶褐色土、そして最上層が、灰褐色を呈する表土である。

今回の調査で、発見した遺構は、方形周溝1基（第1溝）、古墳の円堀（第2溝）、及び中世の溝

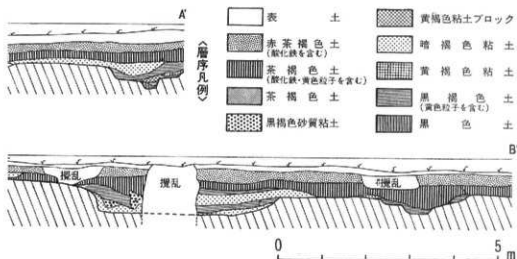


第5図 1・3トレンチ土層断面図(その1)

状遺構(第3, 第4溝)である。これらは最下層の黄褐色粘土層を掘りこんでつくられたものである。いずれも調査範囲に限界があったことと、完掘していないので、詳細については、第二次調査にゆずり、今回は、調査できた範囲内を報告する。



第6図 方形周溝墓(第1溝)実測図



第5図 1・3トレンチ土層断面図(その2)

## (1) 方形周溝墓 (図版二) (第6図)

西溝は、宅地となり調査できず、全形を知ることができなかった。周溝は、隅丸方形よりむしろ円形に近い形をしたプランを呈し、東溝では、中央を欠いている。大きさは南北9.8mを測る。溝の幅は、南溝・北溝とも0.7mを測り、ほぼ一定しているが、コーナーから東溝に移行するにつれて、わずかに広がっている。東溝の中央の溝の途絶えた部分の幅は、約3.3mを測る。

溝底は、平らで、コーナー附近から、東溝に移行するにつれて、漸次浅くなっており、中央の開口部では、緩かに立ちあがって消滅している。溝の断面は、緩かなU字形を呈している。

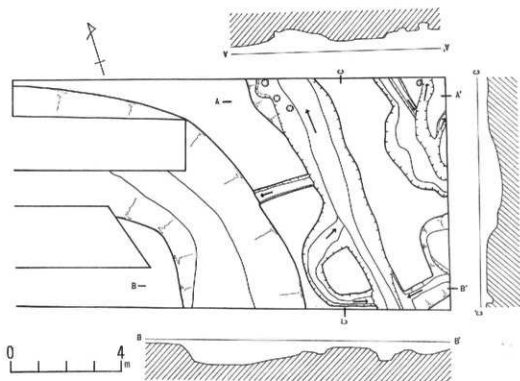
溝中の土層は、殆んど同一の粘土質の黒褐色土が堆積している。

方台中央部は大きく攪乱されており、土壌の検出は遺憾ながらできなかった。

遺物は、南溝中央部より、焼成後穿孔の壺形土器底部片、東溝南部より、壺形土器口縁部、小形手捏土器が発見された。また、南東及び北東のコーナー附近で、より多くの遺物が検出された。

## (2) 古墳の周堀 (図版三) (第7図)

各トレンチで溝内より、埴輪片を出す溝状遺構が確認できた。それは同一性のものと思われる。1・2・3トレンチの拡張では、周堀のコーナー部が、4トレンチでは、「くびれ部」らしき部分が発見されたが、全容は明らかではない。図面上(第4図)から推測すると、南北に軸をもつ前方後円墳の様相が窺える。なぜならば、コーナー部の確認と、「くびれ部」に於ける遺物の出土状態であるが、これは二次調査をまって結論づけたい。そこで、今回は、古墳の周堀として報告する。



第7図 古墳周堀（第2溝）・中世の溝状遺構（第3・4溝）実測図

古墳の周堀の堀方は、第3トレンチでみると、まず地山の黄褐色粘土層を垂直に掘り、その頂点を斜めに削り落し、稜線の崩れるのを防いでいる。掘りこみの深さは、0.6mを測り、底部は、平底を呈している。周溝の外側は、内側の掘りこみとは対称的に、斜めにだらだら傾斜している。周堀の上幅は、4.5m、下幅は3mを測る。

周堀内に堆積した土層は、内側から粘土化した暗褐色土が流れこんで、底部全面を覆っている。その上に、同じく内側から黄色粒子を多量に含んだ黒褐色土が流れこんでいるが、中央よりやや内側寄りに黒褐色砂質粘土のかたまりが混っている。一方、外側では、この黒褐色土層の上部に暗褐色粘土が堆積している。だが、この周堀の中央に攪乱層があったために、遺感ながら、層序の全体を観ることができなかった。

遺物は、第3トレンチ周堀内で、墳丘より転落した状態で、口縁部を下に向けて、斜めに倒立して円筒埴輪が出土した。第4トレンチでは、人物埴輪の頸部、手等が発見された。また、各周堀内から多量の円筒埴輪片及び器財埴輪片が出土した。

### (3) 中世の遺構 (図版五) (第7図)

1・2・3トレンチの東側部分に確認されたものである。第3溝は、南北に走り、第1トレンチ付近では、上幅約2.4m、底幅約1mを測り、第3トレンチ付近では、上幅約1.4m、底幅約0.4mを測る。溝は、北側に向けて幅広くなっており、緩やかに傾斜が認められる。断面は、U字形を呈している。また、第1トレンチ付近では、第3溝に直角に溝が走り、いずれも、第3溝に流れこむかのような形を呈している。さらに第1トレンチ部では、溝の肩部に等間隔で、小さなピットが検出された。深さは、いずれも10cm程である。

遺物は、須恵器片、土師器片が若干出土している。

第4溝は、第3溝に平行した形をとっており、北側に向けて傾斜しているが、明確な遺構をとどめていない。この第3溝・第4溝とも、水路であろうと思われるが、部分的な調査であるので、遺構の性格が明らかではない。

なお、第7図の溝内の矢印は、傾斜の方向を示したものである。

## 4. 南原(高知原)遺跡の出土遺物

### (1) 方形周溝墓溝内出土の土器 (第8図)

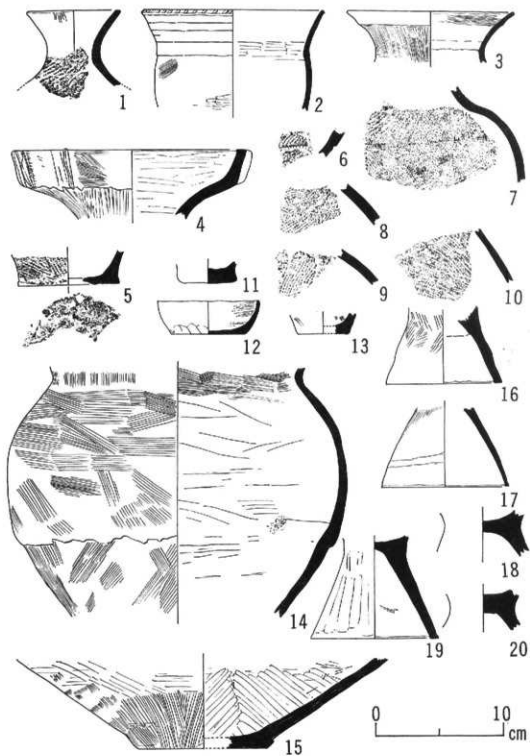
壺形土器(第8図1, 3~10)

1. 頸部は、緩かに「く」の字に折れ、口縁部が溜斗状に外方に開く。口唇部には、櫛歯状工具による整形痕が見られるが、肩部は、縄文が施されている。微砂を多量に含み焼成も悪い。色調は黄褐色を呈す。

3. 口縁部のみである。頸部から外反し、幅の狭い複合口縁を有するものである。内面とも、櫛歯状工具による施文が見られる。微砂を含まず、焼成は堅緻でよい。色調は、赤褐色を呈す。

4. 幅の広い複合口縁を有し、頸部以下を欠損するものである。口縁部が頸部から外反しながら溜斗状に開き、口縁部が、わずかに立ちあがっている。2本を単位とする棒状隆起が8か所に貼り付けられている。器面は荒い櫛歯状工具による施文が見られ、内面は、ヘラ状工具で整形している。胎土焼成とも良い。色調は、暗褐色を呈す。

6~10. 口縁部及び肩部に縄文を施したものである。6は、幅の狭い複合口縁を有しているが、口唇部は欠損している。色調は、淡褐色を呈す。8, 12には、「S」字状結節文が施されている。8は、微砂混りで良くないが、12は、胎土、焼成とも良い。色調は、暗褐色を呈す。



第8図 方形周溝墓溝内出土の土器実測図

## 手捏式土器（第8図11～12）

11. 底部の厚い粗雑な土器である。胎土焼成は良い。色調は黄褐色を呈す。
12. 坏形を呈し、底部は平底である。底辺部に指圧痕が見られる。微砂を多量に含み、焼成もあまり良くない。口唇部は、黄褐色を呈すが、底部は暗褐色を呈す。

## 壘形土器底部（第8図15）

5. 胴下部から、わずかに外反ぎみに開いている。この部分には、荒い縄文が施文されている。平底の底部には、木葉痕がある。胎土は微砂を多量に含んでいるが、焼成は堅緻である。色調は、黄褐色を呈す。
15. 平底の底部から外側に、大きく開いている。底部には、焼成後の穿孔がある。器壁の胴下端部には、櫛歯状工具による整形がみられるが、内面は、ヘラ状工具により整形が施されている。胎土は、良く精選されて密であり、焼成も良好である。色調は黒褐色を呈す。また、一部分にススの付着がみられる。

## 台付壘形土器（第8図14、16～20）

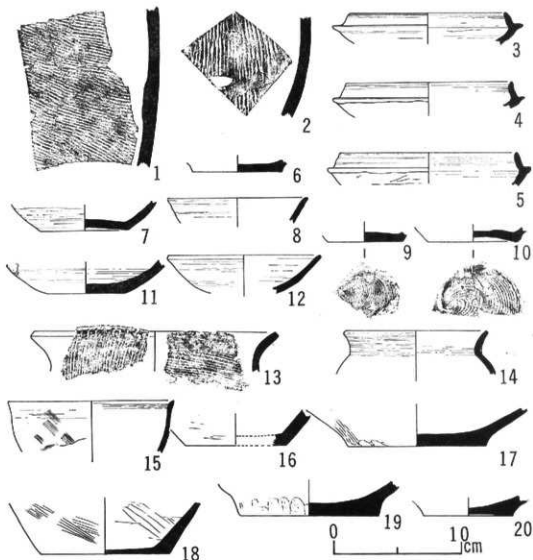
14. 口縁部と、脚部を欠損するが、かなり大型の土器である。「く」の字状の頸部から胴最大径が、上半部にある肩のあった土器である。下半部には、輪積による痕跡がはっきりと認められる。器面及び頸部内面は、櫛歯状工具による整形が施され、内面は、ヘラ状工具による整形が施されている。
- 16～20. 16, 17は、わずかに、膨らんだ「ハ」字を呈し、19はやや直線的である。いずれも底唇部は、内側に稜をなしている。胎土は、微砂を含むが良好で、焼成も堅緻である。色調は、赤褐色を呈す。

## (2) 周堀内出土遺物 (図版六・七) (第9・10図)

## A 土 器 (第9図)

- 1～10は、須恵器である。
- 1・2. 大甕の胴部片である。双方とも表面及び裏面には、蔽き目痕が残っている。
- 3～5. 坏身である。最大径は、15～16cmの間にある。口縁部は内彎しているが4の口唇部はわずかに外反している。蓋受け部の立揚りは、5だけ強い。胎土・焼成・色調とも共通している。
- 6～10. 坏形須恵器である。8・12は、わずかに口縁部が外反している。6・7・9～11は、平底の底部であるが、7・10は、上底を呈している。胎土は、いずれも良く精選されており、密である。焼成は、6・9を除いて堅緻である。色調は、6が灰黄色であるが、あとは、灰褐色を呈する。また、9・10の底部には、糸切り痕を残している。
- 13～20は、土器である。
13. 台付壘形土器の口縁部である。口縁は、頸部から大きく外反し、口唇部に稜をもっている。また、櫛歯状工具による突刺しが施されている。内外面とも、細い櫛歯状工具による施文整形がみ





第9図 古墳周堀内出土の土器実測図

られる。胎土は、良く精選されており密で、焼成も堅緻である。色調は、淡茶褐色を呈す。

14. 甕形土器の口縁部である。頸部は、「く」の字状を呈し、口縁部は外反する。口縁部には、淡い横ナデの整形痕がみえる。胎土は、多量の微砂を含み、焼成もやや軟である。色調は、黄褐色を呈するが、丹塗り痕が認められる。

15. 埴形土器である。緩かな影みをもち、口唇部はわずかに外反している。口唇部内外面とも、横ナデ痕をとどめるが、外面には、櫛歯状工具による施文もみられる。胎土焼成とも良好で、色調は、茶褐色を呈する。

16~20. 平底の底部である。16・18は、底部から直線的に胴部に移行するものであるが、17・19・20は、わずかに屈曲している。また、20はわずかに上底を呈している。いずれもヘラ状工具によ

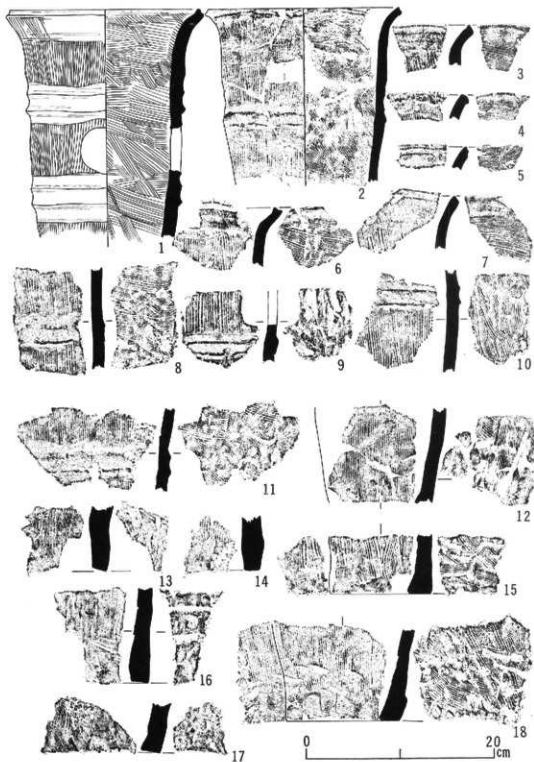
る整形が施されており、19には、指圧痕がみられる。胎土は、16・18に微砂を含んでいるが、共に密で、良好である。焼成は、堅緻である。色調は、いずれも赤褐色を呈す。

## B 埴 輪 (図版六・七) (第10図)

### 1 円筒埴輪 (第10図)

本周鼎内からは、多数の円筒埴輪が出土したが、形状を完全に知ることでできるものは皆無である。そこで、破片のうち特徴のあるものを拾って、個々に説明する。

1. 3トレンチより出土したもので、下半部を欠失しているが、ほぼ形状が知れるものである。櫛目は16条1単位で、断面はV字形である。口縁は、指頭整形が施され、その部分が内傾している。口唇部断面は、角形で内外面が盛り上がり、中間に沈線が施されている。突帯は、幅約6cmで、高さは高いが、中央がかなり窪んでいる。孔は、上から数えて三段目に孔が穿けられている。孔径は、約5cmである。胎土・焼成とも良好で、色調は赤褐色を呈する。
2. 下半部を欠失している。櫛目は、12条1単位で、断面はV字形である。口縁部は、大きく外反している。口唇部の断面は、角形を呈し、わずかに内外面が盛り上がり、中間に沈線が施されている。突帯は、幅約3cmで、高さの低いものである。胎土には白い微砂を含んでいるが密であり、焼成も堅緻で良好である。色調は、茶褐色を呈す。
3. 口縁部が外反し、口唇部の断面が角形を呈するものである。口唇部の内面の指頭整形の部分がわずかに内傾している。胎土・焼成とも良好で、色調は、赤褐色を呈す。
4. 口唇部は、外側で膨みをもって折り返えされている。胎土・焼成とも良く、赤褐色を呈す。
5. 外反する口縁の口唇部に2本の沈線を有するものである。赤褐色を呈す。
6. 口縁は、指頭整形が施され、その部分がわずかに内傾している。口唇部断面は、角形で内外面が盛り上がり、中間に沈線が施されている。胎土・焼成とも良好で、赤褐色を呈す。
7. 外反する口縁の口唇部はカットされたような状態で、切り出し型を呈するものである。胎土は密で、焼成も堅緻である。色調は赤褐色を呈す。
8. 櫛目が8条を1単位とし、断面V字形をなす胴部破片である。突帯は、幅約3cmで、高さが低く、中央がわずかに窪んだ台形を呈する。胎土には、白い微砂を含んでいるが密で、焼成は、堅緻である。色調は、茶褐色を呈す。
9. 断面V字形の櫛目が堅然と施されており、一孔がみえる。内面には、櫛目痕とヘラ削りの痕が残り、整形方法がうかがえる。色調は茶褐色を呈す。
10. 比較的目の荒い櫛目文である。胎土は微砂を含むが、焼成は堅緻である。色調は、灰褐色を呈す。
11. 櫛目は、22条を1単位とする断面V字形のもので、突帯の高さが比較的高いものである。内面には、わずかに輪轆み痕を残している。胎土・焼成とも良好である。色調は赤褐色を呈す。
12. 櫛目は、9条を1単位とする断面V字形のものである。内面には、荒い櫛目と細い櫛目の両方による整形がなされている。色調は、茶褐色を呈す。



第10図 古墳周堀内出土の円筒埴輪実測図

13. 底部がわずかに外側に膨みをもち、底基部の内側が上がっている。外面は細い櫛目であるが内面は荒く、ヘラ削りの痕もうかがえる。色調は、赤褐色を呈す。

14. 底部は内外に膨みを有し、底基部は細くなり、平底を呈するものである。胎土中には白い砂粒を多く含んでいる。色調は、黄褐色を呈す。

15. 底基部の内面に厚みをもち、稜をなしている。また、内面には輪積み痕を残している。色調は、茶褐色を呈す。

16. 底部内面に膨みをもち、底基部内側は、わずかにあがっている。外面は淡い沈線の櫛目がみられ、内面には輪積み痕を残している。胎土・焼成とも良好で、赤褐色を呈す。

17. 底部にわずかな窪みをもち、底基部内側に厚みを増すが、器厚は一定していない。色調は、赤褐色を呈す。

18. 底基部はかなり厚直し、一部にはりつけがなされており、平底を呈している。櫛目は11条を1単位とし、縦方向に整形されているが、底部は、横方向に櫛歯状工具による面取り整形が施されている。内面には、輪積み痕が残っている。胎土中に微砂を多量に含んでいるが、焼成は堅緻である。色調は、茶褐色を呈す。

## 2 形象埴輪 (図版六・七)

本周箱内出土の形象埴輪の主なもの、人物埴輪二体であるが、その他、鞍形埴輪の一部等が出土している。

人物埴輪(図版六) 男子埴輪頭部で、現高26.5cmである。顔面の輪郭は、主長で、長方筒形を呈している。眉と鼻は、はりつけたものであるが、よく整形されている。目、口は大きく、頭には帽子を覆っている。髪はミズラに結ってある。頸には、直径1.3cmの玉をつけている。胎土には、若干の微砂を含んでいるが、焼成も堅緻で、比較的整形の整った出来の良い埴輪である。色調は、赤茶褐色を呈す。

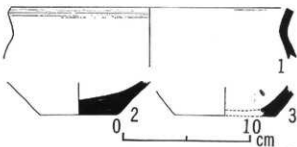
この他、図版七に掲げたように、人物埴輪の顔面の一部、鳥田、手等の各部分及び器埴輪の破片が出土している。

## (3) 中世の状の遺構出土の遺物 (第11図)

本溝内より若干の陶器片が出土しているが、形状の知れるものはない、ここで紹介するのは、溝内出土の土師器である。

1. 頸部が「く」の字を呈する台付甕形土器の口縁で、口唇部には稜を有し、横ナデ痕が見られる。胎土焼成とも悪く色調は茶褐色を呈す。

2・3. 平底の底部である。3の内面にはもみ痕が見られる。



第11図 中世の溝状遺構溝内出土の土器実測図

## お わ り に

以上、戸田市南原（高知原）遺跡第1次調査の概要を述べた。最後に、この調査の結果を整理し予定されている第2次調査を進めるため、南原（高知原）遺跡の性格を把握しておきたいと思う。

**方形周溝墓** 戸市内では、昭和42・43年度に調査した、鍛冶谷・新田口遺跡で12基の方形周溝墓を発見した（畑野博「鍛冶谷・新田口遺跡」—方形周溝墓の調査—戸田市教育委員会）。そこでは、方形周溝墓の平面形態を3つに大別し、その形態の変遷を把握することができた。

この南原（高知原）遺跡の方形周溝墓は、溝の幅が狭く、浅いもので、全体の平面プランは楕円形を呈し、東溝中央部が開いている形態のものであり、鍛冶谷・新田口Ⅱ形態の、鍛冶谷第3・4号、新田口第3・6号と同じ形態のものである。

溝内からの出土品は、すべて土器類であったが、溝底に置かれた状態を呈しているものはなかった。土器は、北溝および南溝の東側コーナー付近に、破砕された状態で、バラバラに出土した。北溝、南溝それぞれの溝内の土器に若干形式の違いがみられたが、北溝の土器（五領Ⅱ式）の方が支配的である。また、方形周溝墓の平面プランも、鍛冶谷・新田口遺跡で明らかになったように、方形がくずれ、楕円形、ないしは小判形を呈するもので、方形周溝墓の終末期の形態とみてさしつかえなからう。また、今回の調査では、一基しか発見できなかったが、この地域には、まだ数基の方形周溝墓が発見できるものと思われる。

**古墳の周堀** 今までに知られていた泉南における荒川下流域左岸の古墳群は、大宮市日進地区から三橋地区の並木・佃ヶ谷戸、植水地区の佐川川・水野土、さらに与野市を経て、浦和市に至る細長い地域にわたる自然堤防上や台地に分布し、泉南地方の代表的な古墳群とされていた。戸田市の乗る標高5m弱の自然堤防上には、鍛冶谷・新田口遺跡や墳構遺跡など弥生時代後期中葉以来の開発があることが明らかになってきた。当然、古墳の築造も予期されていたが、このような状態で発見できるとは考えられなかった。しかも、その規模は、実測図から想定しても大規模なものである。墳形は詳細については、全面的な調査ができていない現在、不明であるが、周堀の状態から察して、円墳とは考えられない。

さらに、調査範囲内の周堀からは、人物埴輪頸部、人物埴輪の部分、さらに器財埴輪の破片、円筒埴輪が出土した。ここで発見された埴輪のうち、円筒埴輪の形態は、桶川町川田谷ひさご塚古墳（前方後円墳）（畑野博「川田谷ひさご塚古墳」桶川町教育委員会）出土のものに類似するところがあり、詳細な検討を要するが、埴輪の供給を知る上に、重要な手懸りを提示しているものと思われる。

さらに、周堀内からは、土師器や、東海地方の編年でⅢ末に比定できる須恵器の坏が発見されており、埴輪の存在とともに、この古墳の築造年代を6世紀末から7世紀初頭に位置づけることが可能である。

なお、この南原（高知原）の古墳址の北東約500mに、現在1基の小円墳を確認してあり、この周辺一帯に、大古墳群址が発見できるものと期待される。

**中世の溝** 荒川の旧堤外にあたる、この南原（高知原）遺跡を含む一帯は、鎌倉から室町時代にかけて、大きな屋敷地（桃井屋敷）であったとの伝承がある地域である。今回発見された溝状遺構は、溝内出土の陶器片などと考え合せて、中世のものと考えられるが、一概に、この屋敷に伴う溝と断定するには、いささか危険であるので、今後、この溝の追跡調査を行ない、その性格を明確にしたい。

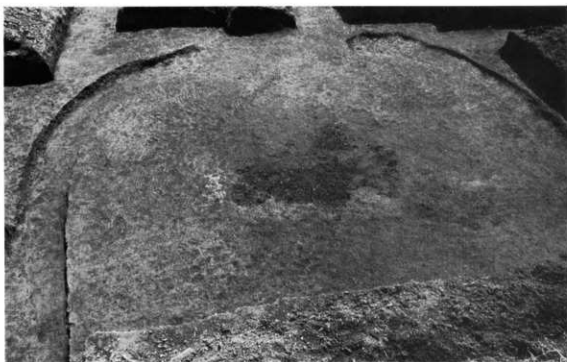


(1) 南原（高知原）遺跡の遠景



(2) 南原（高知原）遺跡の近景





(1) 方形周溝墓



(2) 方形周溝墓北溝



(3) 方形周溝墓南溝







(1) 古墳の周堀（北コーナー）



(2) 古墳の周堀





(1) 人物埴輪（男子頭部）出土状態



(2) 円筒埴輪出土状態





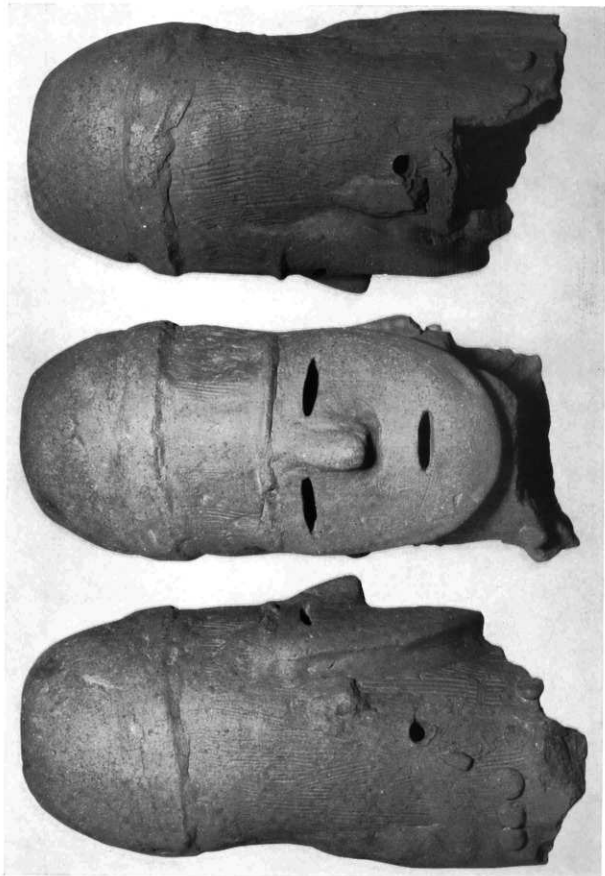
(1) 中世の溝状遺構（北側から）



(2) 中世の溝状遺構（東側から）

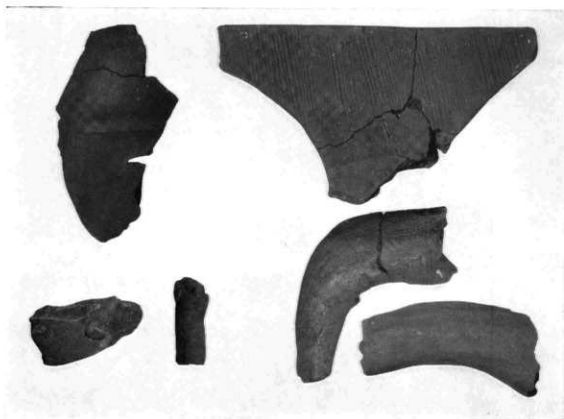


图版六 古墳周堀出土遺物 1

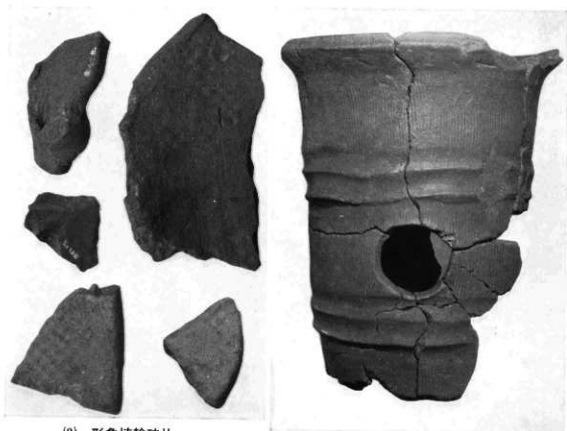








(1) 人物埴輪破片



(2) 形象埴輪破片

(3) 円筒埴輪

4  
5

1  
2

昭和45年3月25日印刷

昭和45年3月30日発行

戸田市文化財調査報告 Ⅱ

## 南原（高知原）遺跡調査報告

発行 埼玉県戸田市教育委員会

印刷 (資) 秀飯舎印刷所